

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 壮(チワン)族の『寨老』と地域社会： 広西北部龍勝県の事例を中心として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚田, 誠之 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00008393">http://hdl.handle.net/10502/00008393</a>

チワン

# 壮族の『寨老』と地域社会

— 広西北部龍勝県の事例を中心として —

## 一、はじめに

中国南部の広西の地においては、歴史上、広域に及び強力で長期にわたる統一的地方政権が形成されなかった。十一世紀半ば、宋朝に反旗を翻した儂智高軍は短期間で潰え、明代以降比較的小さな土官が多く置かれたが、その中で有力になったものは明末より清代中期にかけて王朝によって次々に廃止された。このような勢力の結集と持続を生み出すことがなかったことの背景が多面的に検討されねばならないが、住民の多くを占めた非漢族側の社会のあり方がどのようなものであったかという点もそのうちの一つである。

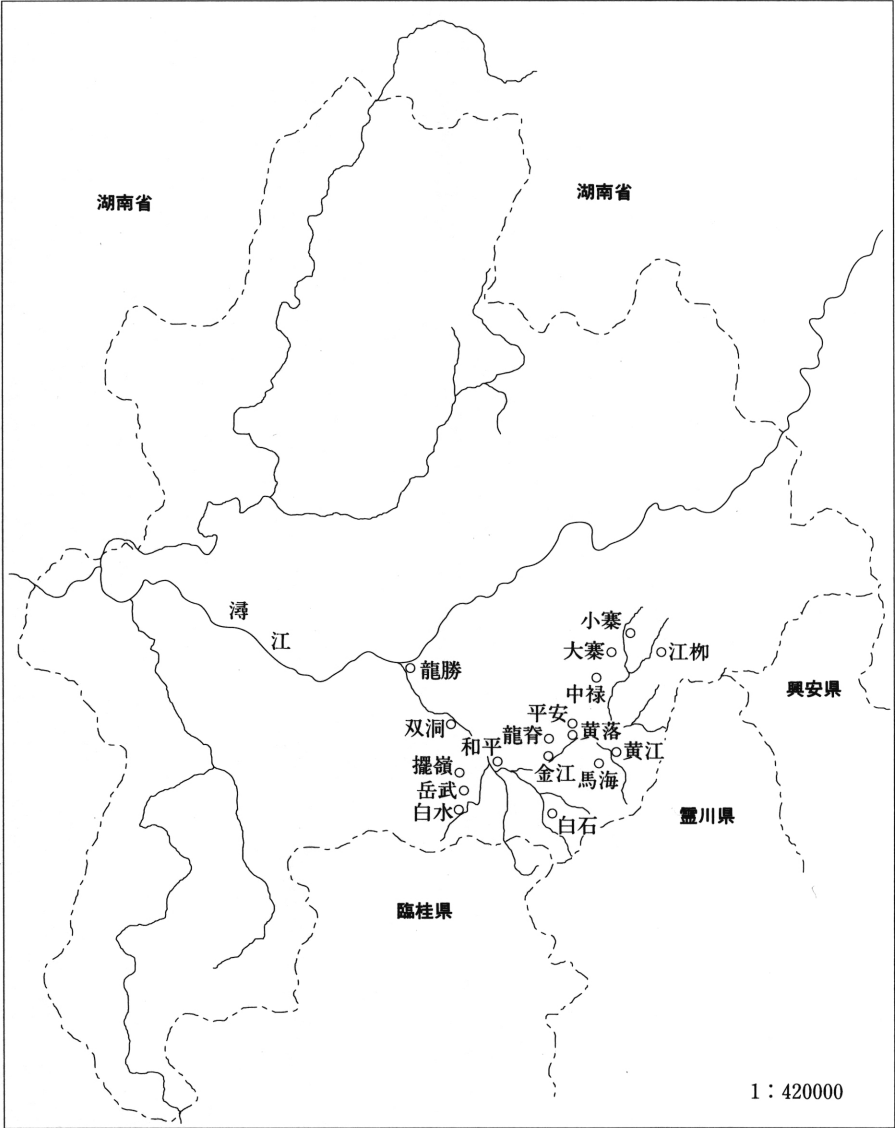
人口約一五五五万人（一九九〇年）と中国の少数民族のうち規模が最大の壮（チワン）族はその九〇％もが広西に居

つかだ・しげゆき——一九五二年生まれ。国立民族学博物館民族文化研究部助教授。北海道大学大学院博士課程修了。文学修士。広西・貴州の諸民族、とくに壮族を中心として中国南部諸民族の歴史民族学的研究に従事してきた。現在は、中華人民共和国成立の前後の時期における諸民族の連続性、近年の民族文化の変化に関心を持っている。共編著に「中国における諸民族の文化変容と民族間関係の動態」（国立民族学博物館）がある。

住する。歴史上、壮族の村落において、非階級的な統率者である「寨老」（註一）が人々のもめごとの調停を行ない、その社会を維持してきたと考えられる。それが人々を結びつける中心的存在であるがゆえに、寨老のあり方を検討することは壮族の社会の特徴を理解するうえで必要不可欠な作業なのである。

寨老を手がかりに壮族社会を考えると、地域社会との関わりという視点が重要となるであろう。そしてその場合、村落や複数の村落群といった地縁的關係、村落を横断する同姓による血縁的結合、さらにエスニシティの異なる多様な集団など、「場」の相違が注目すべきポイントとなる。

本稿の目的は、寨老が地域社会においてどのように関わ



●——龍勝各族自治県略図

つていたのかについて「場」の相違に留意しつつ検討し、その作業を通じて壮族自治区の特徴を探ることにある(註二)。本稿で取り上げる地域は、中国南部、広西壮族自治区の北部に位置する龍勝各族自治县の「龍脊十三寨」である。壮族を中心としながらも、漢族・瑤(ヤオ)族(紅瑤(ホンヤオ)・盤瑤(バンヤオ))が共存する多民族地域である。依拠する材料としては、「広西民族研究所編一九八二」・「広西壮族自治区編輯組編一九八四」などの資料と筆者による聞き取り調査によって得られた資料(註三)とを併用することとする。

## 二、従来の研究

寒老をめぐる様々な問題や、寒老の調停を通してみえてくる壮族の社会のあり方、人々の結集のあり方に見られる特徴について従来の研究には大きな問題点があった。すなわち、「中国少数民族社会歴史調査資料叢刊」の一つである「広西壮族自治区編輯組編一九八四」では、解放後の政治的環境において寒老の階級性が故意に強調されその罪悪が取り上げられた。同書は今となっては得難い貴重な材料を多く用いているものの、時代の制約から受けた視点の歪みが惜しまれる。同書のほか黄鈺の研究「黄一九九〇」・李富強の研究「李一九九三」がある。前者は独自の調査に基づいているものの表面的・総花的な記述にとどまって掘

り下げた検討がなされていないし、記述のなかには歴史的事実の歪曲も見られる。そもそもいつの時点の調査に基づくのが明記されていない。また、後者は社会組織が血縁から地縁のものへと発展したという既製の理論的枠組にとらわれて寒老の本質を見過ごす結果に終わっている(註四)。

## 三、龍脊の地理的環境

ここで対象とする地域の地理的環境について概観しよう。龍勝各族自治县は桂林市の北方百キロメートルほどのところに位置し、全県の平均高度が海拔七百メートルほどの山岳地帯である。同県には壮族・瑤族・漢族・苗(ミャオ)族・侗(トン)族が居住する「各族自治县」である(註五)。壮族や侗族は地域的に集居する傾向があるが、龍脊は壮族の集居地の一つである。「龍脊」は県の東南部の、臨桂県・靈川県・興安県との県境の險阻な山岳地(最高地点約一五〇〇メートル)に位置し、東流する金江の沿岸やその南北、とくに傾斜が緩い北側斜面に集落(寨)山間集落の意)が形成されている。和平郷から約七キロメートルで龍脊の入り口に位置する金竹寨に達する。人口は金江・龍脊・平安・馬海の四行政村に限定すると一〇七八戸・四六三〇人である(一九九六年)。金江村黄落寨に集中する紅瑤と龍脊の周縁部に居住する少数の漢族と盤瑤以外は全て壮



●写真1——龍脊の棚田

族である。大規模な十三の寨名が清代に詩に詠まれた故事から「龍脊十三寨」と通称される。十三寨のうち紅瑤の黄落寨を除いてはほかは壮族の寨である。

壮族には廖・潘・陳・蒙・韋・侯の六姓があり、ともに



●写真2——チワン族の人々（廖家寨）

外地からの移民である。廖家寨・平安寨（註六）・金竹寨・江辺寨・新寨の廖姓は同族であり、廖家寨が草分け的存在である。廖家寨は龍脊の大規模な寨のなかではもつとも高地（海拔八百メートル）に立地する。廖姓は広西西北部の

「南丹慶遠府」から「狼兵」すなわち軍事移民として興安  
県を経由して明末万暦年間〜清代乾隆年間に來住した。  
潘・侯・陳姓も故郷が同じだが、移住年次と移住経路・原  
因は廖姓の場合と異なっている。蒙・韋姓は故地・移住経



●写真3——紅瑶の娘たち（黄落寨）

路がそれぞれ独自のものである。すなわち移住が姓ごとに、  
また小規模集団によって行なわれ、移住の原因・年次・経  
路を異にする諸集団が移住先の龍脊の地で出会い共住する  
ことになったと考えられる。なお、廖家寨から平安寨・金



●写真4——漢族の人々（岩底寨）

竹寨・新寨の場合のように母村・分村の關係が明らかなか場合でも「輩行字」は基本的に寨によって異なっている。そのことは寨の独立性の強さを示している。

寨は集村的な形態をとっており、寨間の境界が可視的に判別できるもの以外に、廖家寨・侯家寨・平寨のように複数の寨が連接して境が判別できないような場合もある。また寨の周囲にそこから分出した小寨がいくつか分布する場合もある。さらに（嫁入女性を除いて）いわゆる単姓村が多いが、複数の姓が一つの寨に共住する場合もある。

生業は棚田による水稲耕作が主体だが、耕地面積が少なく、米穀産出額は住民の自足分にも満たないほどで、階層分化が生じにくい条件にあった。到来する商人もほとんどが小規模資本の者だったので、広西の東部平野や珠江水系に属する河谷の平地の場合のように漢族商人による土地の集積と壯族の佃農化という現象は発生しなかった。龍勝県の県城や和平街では漢族が商業を営んで地主化した。しかし龍脊では大いに事情が異なっていた。経済的に外部から孤立してはいなかったが、壯族が佃農や長工などとして外部の漢人地主・商人に従属することはなかった。險阻な地ゆえ統治権力の影響力が波及した時期も比較的遅かった。

乾隆五年（一七四〇）、吳金銀の峰起の弾圧を機に、同六年（一七四一）「龍勝理苗分府」（龍勝庁）が設置され軍政が開始された。賦役の課派、保甲制・團練制の施行がなされた。寨老が徵發徵収の実務を担当し、統治権力からは「頭

人」と呼ばれた。山中に居住していても統治権力から隔絶されたわけではなかったが、統治は個人のレベルにまで浸透したのではなく、（少なくとも一九三三年に発生した「瑤民起義」までは）頭人＝寨老を通じて間接的に行なわれたのである。

以上から、一枚岩ではない来歴、寨の独自性が強いこと、経済的には自律的であったこと、歴史的に間接的な統治体制がとられてきたことが指摘される。

#### 四、諸民族の概要

龍脊には壯族のほか、瑤族、漢族が居住する。当地の瑤族は紅瑤と盤瑤に分けられる。盤瑤は諸民族のうち来住時期が最も早期であると考えられるが、居住地が壯族の寨からは遠く離れており、かつ集落が零細規模であって歴史において表面には現れない。重要なのが紅瑤である。広西欽州から山中を耕作しつつ移住し龍脊に至って壯族から田地を購入して定着したという移住伝説が伝えられている。彼らが集住する金江北岸沿いの黄落寨は、周囲を壯族寨に囲まれた孤島の様相を呈しているが、規模が大きく（人口三一九人）、龍脊十三寨の一つに数えられる。龍脊では、紅瑤は壯語を話すことができるが、逆に壯族は紅瑤の言語を解しないといわれる（註七）。壯族住民の多く（とくに男性）は壯語以外に漢語（西南官話）を解し、漢語での通話も可能だ

が、それでも前記の事実が、壮族と紅瑤との勢力関係を示しているといえる。ここで注意したいのは、紅瑤が十三寨のなかでは黄落寨のみに居住するが、金江最上流域の高地、中禄村および大寨村・小寨村・江柳村に属するいくつかの寨にも居住し、しかも黄落寨との間に通婚をふくむ往來の關係があることである。十三寨の境内においては紅瑤寨は孤島のように見えるが、実際には同族から分断されて孤立していたわけではないのである。

漢族はほとんどが湖南の新華県から清末光緒年間初期の頃に來住した移民である。來住時期が遅いため、山麓・山腹に広がる壯族の居住地よりも高地の山頂や金江最上流域の村寨に分散して住む。壯族との關係では壯族が優位に立っており、また清末には往々、治安を乱す存在と見られた。廣西の東部など漢族が壯族を圧倒した地域とは逆に龍脊では漢族が壯族の壓迫を受けがちであった。注意したいのは、十三寨の境内に漢族の寨、岩底寨が立地し、ほかの寨も十三寨の外部にはあるが土地が隣接していることである。ゆえに、十三寨の寨老の果たした機能を考えると、漢族の存在も軽視することができないのである。

なお、壯族の現地での自称は「ブーヨイ（布雅伊）」である。「布」は「人」を指す（註八）。婚姻は解放前には基本的に同じ言語を話し同じ習俗をもつ相手のみが対象とされた。一般に壯族の通婚圏は比較的狭い場合が多く、また同姓でも五代以外であるなら婚姻が回避されない。龍脊において

も「十三寨」の「ブーヨイ」の範囲内での縁組みが多かったようであり、同一寨での縁組も少なくなかった。瑤族や漢族との間には基本的に通婚が行われなかった。

壯族と瑤族・漢族は経済的な支配と従属の關係にはなく、平時は互いに独立的であった。多民族の共住とそれぞれの独自性の強さは、龍脊という地域社会の特徴なのである。

## 五、寨老の条件

寨老の諸条件に関する概要を挙げる。寨老の人数は大きな寨なら一―三人、小さな寨なら最低一人であった。複姓村の場合、寨老は何れの姓の者でもよかった。寨老が血縁集團の系譜上の最長者をはじめとするそれぞれの集團の代表者であるかどうかは通常は問題にされず、異姓養子でさえもなることができた。この点で同姓のなかの「輩分最高者」がなる漢族の「宗族」の族長とは異なっていた。

寨老の選出方法は、判断が公正で処理能力があり人々の信賴の厚い者が「推され」て、「自然に」なる。それゆえ、一旦人々の信望を失うと、誰も解決を依頼しないようになりその地位を失うこととなる。逆に人々の信望が厚ければ、調停をする頻度も高くなり、その結果、長期間、場合によっては終身その地位にあり続ける。それは選出方法が確立した任期制の役職ではないのである。寨老は「頭人」として統治権力との交渉にも当たったが、統治権力側は統治の



必要性から在来の寨老を利用したのに過ぎない。寨老は基本的に行政職とは別個の存在であった。経済的には、彼自身も調停を依頼しに来る者と同様、自ら耕作して生計を立てる農民に過ぎない。この点が寨老の大きな特徴で、領民と支配・従属の関係にある土官のような領主ではなかったのである。その地位も土官のように固定的ではなく流動的であって、あくまで個人の調停能力の優劣が問題とされる。調停能力次第で人々が彼のもとに結集し、あるいは逆に去って行ったのである。なお、当事者がある寨老の調停に不服であるときには別の寨老に改めて依頼することが可能であった。その場合、ほかの寨の寨老でもよかった。そうなれば、調停に定評のある者は地域社会において有能な寨老としての威信が高まることになる。土官が被支配層との政治経済的關係に基づいて制度化された階級支配者であるとする、寨老は寨老と当事者との個人的な信頼関係に基づく緩やかな連帯の中心にある非階級的な「調停役」であったのである。

## 六、寨老と地域社会——その一、寨という「場」

人々の日常生活は寨で営まれた。そしてそれぞれの寨には寨老がいた。それぞれの寨老は状況に応じて時に対立し時に連帯をした。対立的關係を示す事件として挙げられるのは、乾隆年間における平段寨の寨老と平安寨・新寨・廖

家寨の寨老との争いである。また、嘉慶年間以降の保甲制の時代には「上甲」に属した平安寨・廖家寨・侯家寨・平段寨とほかの山麓地帯の「中甲」「下甲」に属する寨とが徭役課派に際して対立しがちであったようである。「广西壮族自治区編輯組編一九八四」では、頭人Ⅱ寨老たちが共謀し民を搾取したという側面を強調する文脈において、頭人たちの間の矛盾と対立に関する多くの事例が挙げられている。頭人たちが共謀して民に悪事をなしたという視点からの恣意的な記述が目立つ同書においても頭人たちが対立した事例が紹介されていることからすれば、それは隠蔽し難い現象だったのであろう。こうした対立は寨が人々の生活の基本単位であったがゆえに生じたのであった。一九三三年に広西北部の全州・灌陽県で発生し龍勝など計六県に及んだ瑤族を主体とする蜂起「桂北瑤民起義」において、平安寨で寨老および人々が多く参加したのに他寨ではごく限られた寨老たちしか参加しなかった。この事實は寨が対立的であったことを裏付けている。

加えて、社神、莫一大王といった壮族の人々にとって重要な神祇の祭祀が寨単位でなされたことも寨の独自性を示す重要な要素である（註九）。

なお、一寨の範囲を越える場合もあった。先述のようにある寨の寨老がもめごとを処理し切れない場合、別寨の寨老に依頼してもよかった。加えて、同姓が複数の寨に跨る場合の清明節の祭祀、さらに清末において形成された郷約

を通じての連帯も挙げられる。

## 七、寨老と地域社会

——その二：「同姓集団という「場」

当地の壮族の寨における親族集団には「ダイワー」（家門）・「ラツラン」（房族）というレベルの異なる単位があった。異説もあるが、前者は婚葬儀礼・家の新築などの大事のさいの協同単位、後者は前者より小さい分節で分家・相続・養取あるいは清明節の墓参の単位であったようである（註一〇）。寨老がこうした寨内血縁集団の代表者でもある場合もあったといわれる（註一一）。

近い祖先の墓参はそれぞれの寨で「ラツラン」を単位として行われるが、遠い共通の祖先はいくつかの寨で共同で祭られてきた。清明節の祖先祭祀について廖姓を例にとると、廖家・平安・金竹の三寨およびそれぞれの寨から分出した小規模な寨から代表を出して、一九八八年以前は八灘寨の付近にある祖先（はじめて龍脊に米住した者）の墓参を行なった。一九八八年には移住の経路にあたる興安県に祖先の墓碑を再建し、以後代表が清明節に墓参に行っている。潘姓もすでに解放前、一九三六年に十六の寨が共同で始遷祖の墓碑を和平街の近く大木寨の地に建てている。十六の寨は龍脊のほか、黄江・和平・岳武・双洞・擺嶺などの村に属し、広い範囲にわたっている（註二二）。代表たちは当

然、寨老であったであろう。なぜなら、寨老は祭祀行事の世話人でもあったからである。ともあれ、複数の寨で共同で祖先祭祀を行なうのは、人々にとって場の一つであり、寨老が代表としての役割を果たしたのである。

## 八、寨老と地域社会

——その三：「十三寨」という「場」

清末、道光二年（一八三二）以降、十三寨の寨老たちが中心となって、共同で遵守すべき規範「郷約」（郷規民約）が制定・改修された。とくに光緒四年（一八七八）までの間に多く制定された。「广西壮族自治区編輯組編一九八四・一〇一—一〇二」によると、毎年春秋の始めに十三寨の主な寨老たちが集結して会議「議団」を開催して郷約が制定された（註二三）。そして議団に参加した寨老たちがそれぞれの寨に帰って集会を開いて民に通知するとともに、その条文を木板に書いて寨の要路に吊るしたという。郷約制定の背景にある状況として、湖南漢人を主体とする移民の流入が増加し、そのことにともない治安が悪化したことが挙げられる。とくに同治年間〜光緒年間に制定・改修されたものが防匪・防盜を強調しているといわれ「广西壮族自治区編輯組編一九八四・一〇一—一〇二」、その頃治安状態が最も悪化した。

郷約制定の中心となったのが、十三寨の寨老たちの代表

「大寨老」で、彼らが中心となつて「十三寨群衆大会」を乾隆七年（一七四二）から民国三十八年（一九四九）にかけて十二回召集したといわれる〔黄一九九〇〕。それぞれの内容についてはここではふれないが、「大会」はタイトな組織であつたとは考えにくい。また、自治的ではあつたものの統治権力を背景ともしていた。そのため十二回の「大会」のなかには、治安維持に関する内容のもの以外に、統治権力の政策を下達宣布する場合があつた。

ともあれ、清末の時期に十三寨の一体性が強調されて大寨老を中心に会議が開催された。それは人々にとつて「場」の一つとなつたのである。

## 九、寨老と多民族社会

### ——その一、紅瑤との関係

紅瑤の黄落寨は龍脊十三寨に含まれ、自前の寨老を有していた。道光二十七年（一八四七）、壮族の平段寨との間に漁労区域をめぐるもめごとが発生した。十三寨の寨老たちの代表「龍脊団頭人」が調停しようとしたが失敗し、統治権力に訴えた。結局、権力側が両寨間の漁労区域を定めた。このとき「龍脊団頭人」には黄落寨の寨老も含まれていた。したがつて、彼らは十三寨を代表するだけでなく黄落寨の代表としても動いたのである。この場合はもめごとの当事者となつているが、ほかにも黄落寨が十三寨を代表して他

寨のもめごとの調停をも行なつた例がある。たとえば、道光二十三年（一八四三）に、楓木寨の陳姓と廖姓との間に漁労区域をめぐる紛争が発生した。それに官側が介入して区域の画定をしたが、その際に先の黄落寨の寨老が「頭人」として他寨の寨老とともに刻名されている〔广西民族研究所編一九八二・一五二—一五三〕。これにより、黄落寨が十三寨の一員として扱われ隣接する他寨からも調停を依頼されていくことが明白である。

加えて、解放前に黄江村にて漢族の間に水争いが発生したが、その調停において平安寨の寨老のほか、黄落寨の寨老にも依頼をしたという。当地では通常、彼らのほかに十三寨の外部にある路底寨の壮族の寨老や、黄江の漢族の代表たちも調停を行なつたという。人々の活動は十三寨の内部だけでは完結せずに、土地が隣接（この場合、平安・黄落と黄江）していることを媒介として十三寨と外部とが関係していたのである（註一四）。ともあれ、黄江一帯の漢族地域でも黄落寨の紅瑤寨老は活躍していたのであり、この点で、紅瑤寨老は壮族の寨老と同等の地位にあつたのである。

紅瑤はその服飾や言語、また年中行事（壮族にはない旧暦六月六日の祭りを行なつたり、七月の中元節を七月十二日に行なう）などにおいて壮族との文化上の相違は顕著である。女性の桃色を基調とした色鮮やかな上着は「紅瑤」と呼ばれるものであるが、それは一見して壮族とも漢族とも異なるものである。婚姻もかつては紅瑤同士で行なつていた。こうし

た文化面での距離にもかかわらず、調停に関する限りでは寨老としての個人の力量が重視され、民族的相違は無条件の前提とはなっていないようである（註一五）。

なお、先述のように十三寨のなかでは黄落寨は唯一の紅瑤寨だが、十三寨の外部にあつて金江最上流域の高地に位置する中禄村・大寨村・小寨村・江柳村には多くの紅瑤が分布する。一帯の地域における紅瑤の推定人口は約四七〇〇人で、十三寨の壮族の全人口を上回るほどである。寨老としての個人的力量がいかに重要であるとはいえ、民族集団としての勢力も背景として軽視することができないであろう。

ともあれ、この事例からは、厳密には十三寨の範囲を超える地域である黄江での紛争にも付近の路底寨や漢族寨の有力者とともに十三寨の寨老が関与していること、十三寨の東端にある平安や黄落にとつて地域社会として十三寨以外に黄江の漢族地域も含まれていたことが指摘されるのであり、寨老を中心として人々が結びつく範囲が十三寨に限定されていないことが明らかである。この点について、次に漢族地域に目を転じてみよう。

## 十、寨老と多民族社会

### ——その二、漢族との関係

漢族について、非定住の商人・手工業者と定住農民の二

つに分けて検討しよう。前者について要点を挙げると、当地では鉄の鍛造や瓦作りの技術、さらには食塩・陶器・葉などはもっぱら外部に依存していた。鉄鍛冶は湖南人が多かったという。一時的に当地に住み着いて鍛造する以外に行商が既製品を売りに来る場合もあった。瓦焼き職人や家屋建築に従事する木匠もかつては湖南人が多かったという。食塩や陶器は和平街や臨桂県・靈川県などから来る漢族商人に供給を依存するか、もしくは自ら購入しに赴いたという。

湖南からの商工業者は龍脊のみならず、黄江やさらに和平街にも多く進出した。和平街ではそうした商人の一部が政治的に有力化したという。清末における湖南を中心とする地域からの人の移動の大きなうねりがあつて、その流れの一派が龍脊にも到来したのである（註一六）。

次に漢族農民について見よう。多くの湖南漢人が入植した黄江村では、現在も千人ほどの人口のうち約六五%（推定）を漢族が占めている（註一七）。黄江は十三寨の外部にあるが、このほか十三寨には数えられないものの、十三寨境内にも漢族の寨がある。それは金江南岸の急斜面に立地する岩底寨である。

岩底寨には湖南の新華県から清末光緒年間に来住し当地の壮族から土地を借りて入植したという曾姓と羅姓とが居住する。言語・服飾・年中行事（とくに中元節の期日）などにおいて壮族と異なっているし、漢族の場合、寨老ではな

## 十一、整理

まず本稿で検討したところを整理しよう。壮族の人々とつてまとめ役であった寨老は個人の能力にしたがってもめごとの調停を行なった。その地位は流動的であつて、調停能力次第で人々が彼のもとに結集したり、あるいは逆に去つて行つた。

寨は人々の生活の基本単位であり、寨老が寨内の行事の世話をしたり、また彼自身が寨内血縁集団の代表者でもある場合もあつたといわれる。そして寨を越える連帯として、同姓集団、そして龍脊の上甲・中下甲、龍脊十三寨、さらに十三寨を越えてそれぞれの寨に近接する地域という場があつた。それぞれの場は個人にとつて重層的であつたと考えられる。

十三寨の間にはとくに清末の治安が悪化した一時期において寨老たちを中心として生まれた郷約に基づく「戦時連合」的なつよい連帯が生まれた。また、寨老たちによる郷約の制定・修改のための「大会」が開催された。しかし、それはタイトな組織ではなかつた。

十三寨の範囲を越える地域でも寨老は機能した。漢族地域での紛争にも付近の漢族寨の有力者とともに十三寨の寨老が関与した。寨老は自寨を中心とする他寨との関係を考慮して、戦略的な選択をしたのである。なお、解放前において調停に関する限りでは寨老としての個人の力量が重視

く姓の代表 $\parallel$ 族長が指導者的存在である。岩底寨の入り口付近に石碑が残されている。それは、岩底寨とその麓にある江辺寨との間の、霜降以降の時期における金江の用水の制限を伝える内容のもので、光緒三十二年（一九〇六）に建立された。碑文には裁定を行なった「地方人」（頭人）として、七名の人物の名が刻まれている。その内訳は楓木寨・八灘寨・江辺寨・黄落寨の寨老のほか、岩底寨の曾姓の代表者「曾光明」の名がある。岩底寨は漢族寨だが、そのなかの曾姓の代表が壮族や紅瑤の寨老とともに調停を行なっていることになる。この点は先の黄江の事例にも通ずるものがある。すなわち土地の近接する数寨の寨老たちが共同で処理に当たつており、調停に関しては壮・漢・瑤の民族の違いによる問題は表面に現われていないという点においてである。寨老の役割に注目すると、清末に郷約によつて湖南人の入植制限が提唱された。しかし寨は基本的に独立的存在であるがゆえに、寨老は自寨を中心とする他寨との関係を考慮して、戦略的な選択（この場合は調停）をした。楓木寨・八灘寨・江辺寨が、十三寨の範囲を越えるものの土地の接する岩底寨との連帯をしたことの背景には、寨老を中心として結びつく範囲が十三寨のみにとどまらないという事情があつたのである。

以上の検討から、寨老を中心とする人々の連帯の範囲は伸縮性に富んでおり、そして多様であつたことを指摘することができるであらう。

され、民族的相違による対立は少なくとも表面化はしていなかったようで、紅瑠の寨老も壯族とともに活躍した。

寨老を中心とする人々の連帯の範囲は伸縮性に富んでおり、そして多様であった。それは場面によって戦略的に使い分けられた。龍脊では地域社会はこのような側面を持っていたのである。寨老は人々の結集の中心に位置していたが、あくまで寨老と当事者とは二者間の個人的信頼関係に基づく緩やかな関係にあった。この地域に強力な独立の統一政権が形成されなかったことの一つの背景を、壯族社会の、村落を越えるレベルでの人々の恒久的かつタイトな連帯が形成され得ず、寨老を磁源として寨老ともめごとの当事者たちが緩やかに結びつくだけである、という特徴に求めることができまいであろうか。

もとより、本稿では、寨老と地域社会との関わりに問題を限って、龍勝県龍脊地域の事例を検討したに過ぎない。寨老を中心とした壯族社会の理解には、歴史的变化を押さえたさらに一步踏み込んだ検討が必要であるし、直轄地以外に土官地域における事例にも留意する必要がある。今後の課題として確認しておきたい。

●註●

(註一) 当地の壯語では「ポウワン」(公寨)・「プーギウ」(入頭)・「プーギウワン」(入頭寨) あるいは「某公某老」などと言う。寨老という言い方は解放後におけ

る外部からの呼び方であるが、本稿では便宜上「寨老」という表記をする。

(註二) 寨老の役割と歴史的变化については別稿で検討する予定である。

(註三) 筆者による調査は一九八九年十二月・一九九〇年一月、一九九〇年七月、一九九二年三月、一九九七年八月、一九九八年三月、一九九九年四月に行なわれた。

(註四) なお、菊池秀明氏は、明代に広西中・東部に新設された土官や清末の大官で土官の末裔であった岑毓英の一族を中心として、政策との関連に注目しつつ壯族の漢化を検討した論文において、寨老が壯族社会に固有な政治的合理性をもち、それゆえに寨老を起源とし寨老を勢力の基盤とした土官の支配が安定的であったこと、壯族が寨老制を選択して統一国家形成を志向しなかったことに論及している「菊池一九九四」。ただし、寨老の検討が主題ではないので、寨老制を選択することがなぜ統一国家形成と異なる方向になるのかは示されていない。

(註五) 人口は壯族が約三・二万人、瑠族が約二・七万人、漢族が約三・八万人、苗族が約二・三万人、侗族が約四・三万人(一九九〇年)と大きな隔たりがない。

(註六) 「平安寨」はもと馬城、毛呈などと称し、一九三三年、「瑠民起義」後に弾圧されて「平瑠寨」に、ついで「平安寨」に改名された。本稿では便宜上「平安寨」の名で表記する。

(註七) 黄落寨の紅瑠は、ユーニエン(優念)語のうち、プヌ(布努)語の方言の一種「山話」を使用すると言わ

れる「王一九八四」。

(註八) 相互の称谓は、壮族は紅瑤から「ケーチヨン(客壯)」、岩底寨の漢人からは「壯人」ないし「ヨイ」の後面に寨名を付けた名称で称された。紅瑤の自称は「ユーノウ(瑤人)」で、壮族から「ホンヨウ(人瑤)」「ヨウリン(瑤紅)」と、岩底寨の漢人から「瑤人」と称された。

(註九) 寨老の任務として、もめごとの調停のみならず、社祭・莫一大王祭などの儀礼の世話役、廟の建立・補修、橋や道路・用水路の開設・補修といった公共事業の指揮なども含まれた。

(註一〇) 「広西壮族自治区編輯組編一九八四・一一一・一一二、一一五」によると、ダイワーを「台瓦<sup>タイワ</sup>」、ラッランを「哆蘭<sup>トラン</sup>」とし、それぞれ「宗族」「門族」、「房族」に相当するとしている。そして前者は同姓村の場合その範囲に一致し、共同の祖墓を有しその祭祀のための蒸嘗田をもち清明節に共同で祭祀をする単位で三代を越えること、後者は分家・相続・養取の際に同意が必要な三代以内の範囲であることが指摘されている。なお、それらの集団が解放後に機能しなくなつてから久しい今日、そうした概念を知らない人も少なくない。

(註一一) 黄鈺によると馬海寨では蒙姓・韋姓がそれぞれ別の集落に居住しており、寨老は姓の代表でもあったといひ、寨老組織には実際には族長組織が含まれると論じている「黄一九九〇」。馬海寨のように姓ごとの居住地が分かれていてもその代表と寨老とはあくまで別物と

考えられるが、ラッランのレベルでの有力者と寨老とが同一人物である場合は当然想定することができる。なお、ラッランのレベルでの有力者は特定の用語はないが、「広西壮族自治区編輯組編一九八四」では「房老」と称している。

(註一二) 潘姓墓碑の建立は解放直前期、廖姓による合同での清明節祭祀は近年のことであることからすれば、地域的な同姓者の連帯が歴史的に拡大してきたことを示す事例でもある。

(註一三) なお、寨老たちによる郷約制定の会議は廖家寨の「龍脊大廟」か廖家寨の付近の地に開催された。そしてその際に寨老のなかから三〜五人の代表「大寨老」を処理の公正さ・公益事業への熱心な取り組みなどを基準として「民主的に」選出したという。

(註一四) 入植に際して黄落寨や平安寨から土地を購入した漢人も少なくない。

(註一五) 解放直後の一時期には民族の違いによるもめごとが噴出し、「一つの集落内でどの民族でも人数が多ければ、ほかの少数派の民族を威圧する」(「広西日報」一九五〇年十月十日「龍勝整風批評工作欠点忽视少数民族聽任民族糾紛發展」と記されたほどであった。解放直前期においても水面下での動きが推測されるころである。

(註一六) なお、漢字漢文教育について「広西壮族自治区編輯組編一九八四・一四〇〜一四二」によると、清末に廖家・侯家寨・平安寨に私塾が作られ、義寧県や靈川

県の漢族が教師として招聘されたという。このほか外部に出かけて学んだ者もいた。

(註一七) このほか盤瑤が二六%、壮族が九%を占めた。

●文献●

広西壮族自治区編輯組編、一九八四『広西壮族社会歴史調査』第一冊、南寧・広西民族出版社。

広西民族研究所編、一九八二『広西少数民族地区石刻碑文集』、南寧・広西人民出版社。

黄钰、一九九〇『龍脊壮族社会文化調査』『広西民族研究』一九九〇(三)。

菊池秀明、一九九四『明清期、広西チワン族土官の「漢化」と科挙』『中国 社会と文化』第九号(同氏『広

西移民社会と太平天国』、一九九八、風響社、に収録)。

李富強、一九九三『壮族の都老制及其蜕变』『広西民族研究』一九九三(一)。

王均、一九八四『広西龍勝「紅瑤」的優念話』北京市語言学会編『羅常培紀念論文集』北京・商務印書館。

# アジア遊学

毎号一、八〇〇円

(価格は税別)

アジアを多面的に捉える、意欲的な刊行物！

## ◆10号 地獄と極楽

勝木言一郎 石鼓廟地獄図壁画の図像について  
佐藤道子 地獄と救済  
―三部長講会にみる

山本宏子 福建省泉州の芸能と地獄・極楽  
辻 正博 中国中世の冥界と地獄

菅澤 茂 日本建築における装飾の展開について  
―浄土表現の変化を辿る

樋口 昭 飛天が奏でる天宮の楽  
―石窟壁画にみる楽器の形状

服部等作 西北インド・ガンダーラにおける楽園の系譜  
―化粧皿にみる楽園と饗宴のイメージ

宮下佐江子 古代西アジアの天国と地獄

### ◆連載

道教聖地探訪の旅 第六回  
奈良行博 常春の郷・雲南(六)

古都古城紀行 4  
吉田とよ子 南京城(四)

## 勉誠出版

〒一〇二〇〇八五 東京都千代田区六番町6-14  
☎03(52115)9021 FAX(52115)9025

